

2022年8月28日 主日礼拝

説教題「私たちと共に歩み、私たちを超える神」マルコ福音書 9～15 節

主任牧師 加藤 誠

「イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神に国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」(マルコ 1 章14-15節)

この夏の東京バプテスト神学校の公開講座で金丸英子先生(西南学院神学部)が、今、アメリカのバプテスト教会ではどのようなことが語り合われているのかを紹介しながら、『バプテストに未来はあるのか?』というビル・レナード先生(キリスト教史)の発題を紹介くださいました。アメリカは今、人種差別、セクシュアリティなどの課題を巡って、大きな分断が深刻化しているようですが、キリスト教会も深刻な危機に直面していて、プロテスタントもカトリックも主要な教派は軒並み教会員数や礼拝出席者数が減少し、プロテスタントで最大教派と呼ばれてきた南部バプテスト連盟も 2000 年以降、教勢の低下に歯止めがかからないということでした。「これから教会はどうなるのか?」「我々が今、取り組むべきことは何か?」という強い危機感の中で、ビル・レナード先生は「バプテストに未来があるのか?～あるとしたら、それは求める大胆な信仰～」と語られていました。

教会に未来があるとしたら、それは聖書のイエス・キリストをもう一度新たに受け取り直していくこと。あのガリラヤの岸辺で主イエスが人びとの間で力強く語られた、「神の国は近づいた!」(神さまの新しい日が始まっている!)という宣言を、今さまざまな課題に直面し呻いている私たち自身に向けて語られている希望の宣言として受け取り、自分の言葉で人びとに紹介していく。バプテストに未来があるとしたら、そこにかかっているのではないかとレナード先生は語られたのです。

その問いかけに背中を押されて、今朝はマルコ福音書の 1 章の「神の子イエス・キリストの福音の初め」という箇所にも聴きたいと思いました。9 節から 15 節には、簡潔に最小限の言葉で、主イエスが「神の子」として特別な使命を与えられてその活動を始めたことが紹介されています。例えば「” 霊”」という言葉が 2 回出てきます。なぜ「” ”」がつけられているのかというと、原文のギリシャ語では「霊」が大文字で書かれていて「神の霊」を意味しているからです。つまり主イエスは「神の霊」に導かれてヨハネからバプテスマを受け、「神の霊」に導かれて荒野でサタン誘惑を受けられました。ヨハネのバプテスマは「悔い改めのバプテスマ」であり、それまで神に背いて生きてきた罪の告白を伴うバプテスマです。本来なら「神の子」が受ける必要のないものでしょう。またサタン誘惑も「神の子」には似つかわしくないものです。ただ、主イエスは「神の子」ではなく「人の子」として私たちと同じように罪の中に生き、毎日サタン誘惑の中に生きる「人の子」として私たちと同じ地平を共に歩まれた方であることを、マルコは語っているのです。

同時に主イエスは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」と、毎日、罪と誘惑の中に生きている私たちに、「神の新しい日が始まっている！一緒に神の新しさの中を生きていこう！」と招かれます。

「私たちと共に歩みながら、私たちを超える神」。私たちの悩み、苦しみ、悲しみを共に生きながら、私たちに神の新しい日々を指し示して導いてくださる神。それが「神の子」イエス・キリストです。

マルコ福音書の時代も「戦争の時代」でした。実はイエス・キリストが十字架で処刑されて約30年後ころにマルコ福音書は書かれたのですが、このころイスラエルはローマ帝国によって徹底的に滅ぼされ、エルサレムの都も壊滅してしまいます。けれどもその「迫害と戦争の時代」「暗闇の時代」において、主イエスとその十字架と復活を通してあらわされた「神の新しい恵みの日」を受けとり生きていこう！…と、イエス・キリストの福音を人びとに紹介したのがマルコ福音書だったのです。

「私たちと共に歩み、私たちを超える神」。主イエスは当時の聖書の学者たちのように、神殿に座って人びとに教える教師ではなく、人びとの暮らしの中に入っていき共に歩まれた方でした。主イエスは不思議な方で、まるで磁石のように、悩む人、破れた人、社会からはじかれ傷ついている一人ひとりに寄り添い、歩まれました。主イエスは人間の弱さ、貧しさを知り、また死別の耐えがたいことを知っておられました。あらゆる病を負った人が癒されたいと主イエスのもとにやってくる時、主イエスは心底はらわたを動かされ、主イエスの中から癒しの力があふれ出ていったのです。主イエスは私たち人間と共に歩む神として、私たちを慈しみあふれる神との愛の交わりに招き入れてくださったのです。

それでいながら主イエスは私たちの間にあって神の自由を生きられました。人びとの目や世間の評価にとらわれることなく、社会的地位のある人々の顔色をうかがうようなことを一切せず、また権力や暴力の脅しに屈することなく、まっすぐに神さまの真理を生きられました。妥協や、あきらめや、言い訳や、忖度という人間の弱さを打ち破って、この世界を貫いている神さまの真理を示してくださったのです。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。「悔い改め」とは、私たちが方向転換して、神さまの愛と正しさに心も体もしっかりと向けて生きていくことへの励ましです。ただ、そのときに大切なことは、神の国（神さまの愛と正しさ）は、私たちの頑張りで実現していくものではなく、神の国の方から近づいてくるもの、向こうからやってくるものだということです。この世界の実情を見ている限り、私たちはなかなか神さまの愛や正しさを見出すことが難しいのですが、神さまは、神さまのふさわしい時をとらえて神さまの方法で、この世界を神の国に導き続けてくださっている。その主イエスの宣言を大切に受けたいのです。